

聖書：I サムエル 25：1～44

説教題：愚か者と聡明な者

日時：2017年6月11日（夕拝）

今日の章に一人の新しい人が登場します。その名はナバル。2節にありますように、彼はカルメルで事業をしていて非常に裕福でした。羊3000頭、やぎ1000頭を持っていました。しかし彼の評価はどれも良くなかったようです。3節に彼の妻アビゲイルは聡明で美人であったが、夫のナバルは「頑迷で行状が悪かった」と記されています。また17節を見ると、彼の下で働く若いしもべがナバルのことを「ご主人はよこしまな者ですから、だれも話したがらない」と言っています。また彼の妻アビゲイルも25節で「あのよこしまな者、ナバルのことなど気にかけてください。あの人は、その名のとおりの男ですから。その名はナバルで、そのとおりの愚か者です。」と言っています。その「ナバル」という言葉には印がついていて、欄外の25を見ると「愚か」の意とあります。果たして親が自分の子に「愚か」という名を付けるのでしょうか。だからこれはニックネームだったに違いないと多くの注解者は言います。おそらく本名がこれと似ていたの、人々はそれを文字通り、いつしか彼をナバルと呼ぶようになったのだろうと。そして愚かな人は逆にそう呼ばれることに誇りを持ったりするものです。愚かで結構！私は人々が何と言おうと、こうやって財を貯え、事業を成功させているのだ！と、むしろこの名を好んで使っていたとも考えられます。

そのナバルがしたことはダビデの願いを拒否したことでした。ダビデはサウルの手から逃れる中、生計を立てるため、この荒野でナバルの家畜を守る働きをしていたようです。当時、荒野にはよく略奪隊が現われました。その略奪隊から財産を守るには、周りの人々のサポートが欠かせません。ダビデたちはその働きをかって出て、いつかその報酬にあずかることを！と願っていたのでしょう。ダビデたちの働きについてはナバルのしもべたちがこう証言しています。15～16節：「あの人たちは私たちにたいへん良くしてくれたのです。私たちは恥ずかしい思いをさせられたこともなく、私たちが彼らと野でいっしょにいて行動を共にしていた間中、何もなくしませんでした。私たちが彼らといっしょに羊を飼っている間は、昼も夜も、あの人たちは私たちのために城壁となってくれました。」そして羊の毛の刈り取りの祝いの日が来たこの日、ダビデは自分たちにも何らかの親切を施して欲しい、と願い出たのです。ところがナバルはこれを拒否しました。10～11節：「ダビデとは、いったい何者だ。エッサイの子とは、いったい何者

だ。このごろは、主人のところを脱走する奴隷が多くなっている。私のパンと私の水、それに羊の毛の刈り取りの祝いのためにほふったこの肉を取って、どこから来たかも分からない者どもに、くれてやらなければならないのか。」 この侮辱的な言葉に接してダビデは 13 節で「めいめい自分の剣を身につけよ。」と部下に命じ、ナバルはダビデから攻撃されそうになったのです。

この 25 章は何を語ろうとしているのでしょうか。ナバルはその名の通り、愚か者で、さばきに値するということでしょうか。私たちは彼を反面教師として、隣人にあわれみ深くあるようにと学ばば良いのでしょうか。確かにナバルのしていることには問題があります。しかしこの章の一番の関心はそこにあるのではない。この章が問題にしているのは誰でしょう。それはダビデです。特に 13 節の彼の態度です。願った通りに事が進まず、侮辱されたからと言って、その仕返しをして良いのでしょうか。ダビデは 21～22 節でナバルへの報復をこのように心に誓っています。「私が荒野で、あの男が持っていた物をみな守ってやったので、その持ち物は何一つなくならなかったが、それは全くむだだった。あの男は善に代えて悪を返した。もし私が、あしたの朝までに、あれのものうちから小わっぱひとりでも残しておくなら、神がこのダビデを幾重にも罰せられるように。」 この彼の決心が変えられて行くところに、今日の章のメッセージがあります。

そのために大きな役割を果たすのがナバルの妻アビガイル。彼女は「聡明で美人であった」と 3 節にありましたが、即座に対処・行動しています。18 節でダビデたちへの贈り物を準備し、23 節以降でダビデに会うと、ひれ伏して、「あの人の罪は私にあるのです」と赦しを請います。そして今日の章の中心となる言葉を語って行きます。大きく分けて三つのことを彼女は語っています。その第一は 25 節にある通り、「あのよこしまな者、ナバルのことなど気にかけてください」ということ。「あの人は、その名のおりの男ですから。その名はナバルで、そのとおりの愚か者です。」と彼女は言います。彼女がこのように夫の愚かさを強調するのはなぜでしょう。それは愚か者に対して過剰に反応するなら、あなたも自分を愚か者とすると言いたいからでしょう。こんな彼に仕返しするなら、あなたは自分を同列に置くことになる。だからその道を行かないように！彼のことなど気にかけてないように！と彼女は言います。

二つ目にアビガイルが言っていることは、ダビデに対する主の約束と守りについてで

す。28 節を見ると、「主は必ずご主人さまのために、長く続く家をお建てになるでしょう。」と彼女は言います。そしてあなたが主の戦いを戦っている限り、災いはあなたの身に起こらない！と言います。29 節では、人があなたのいのちを狙っても、あなたのいのちは、「あなたの神、主によっていのちの袋にしまわれている」と言います。これまでのダビデの生活を思い起こしてみるなら、これはピッタリ事実を言い当てるものです。サウルに追われる中、ダビデは神の特別な守りの中で守られて来ました。そして 30 節で、「主があなたについて約束されたことはすべて成し遂げられ、あなたは必ずイスラエルの君主になる」と言っています。アビガイルはどこでこれほどの確信を持ったのか、と私たちは驚きますが、見る目を持つ人にはダビデはそうに見えたということなのでしょう。このような神の約束を頂いているあなたが、ナバルのしたことにいちいちかんしゃくを起こして、その血を流すことはむだなことだと彼女は言います。主がダビデを守り、祝福してくださるのだから、主に信頼していれば十分なはずであると。

そして三つ目に彼女が言っていることは、31 節にあるように、もしあなたがナバルに復讐したら、あなたが王になった時に、そのことはあなたのつまずきになるということです。サウルは以前、激情して祭司の町ノブを全滅させましたが、ダビデも怒ってナバルの家を全滅させたら同じことになります。それはあなたの汚点となり、あなた自身がつまずき転ぶ結果になりかねない。またそれはあなたの「心の妨げ」になると言います。すなわち王になった後で、自分はその時、一時の感情で取り返しのつかないことをやってしまった！という苦い罪の記憶によって繰り返し心が苦しめられることになる。心からは平安が失われ、何をすることにおいてもその心にブレーキがかかり、その生活が妨げられる。こうしてアビガイルは一時の衝動によって行動することがその後の生活にいかにか大きな影を落とすか、ということ警告し、よくよく考えまた冷静に判断するようにと勧めているのです。主が備えている将来の祝福に清い良心と心からの喜びをもってあずかるために、後から後悔する罪をここで犯さず、さばきはその権限を持つ主にお任せよと言ったのです。

さてこの忠告に対してダビデはどうしたのでしょうか。彼はそれを受け入れ、正しい信仰に戻りました。ここから私たちはダビデについて二つのことを知ります。一つは彼もまた弱い人間であったということです。皆さんは前の 24 章の内容を覚えているでしょうか。前の章のテーマも実は個人的復讐についてでした。ダビデは自分と同じほら穴に入って来たサウルに対して「今こそ手を下すべきです！」と主張した部下たちの進言を

退けました。そして「主が報いをされる！」と告白して個人的仕返しをしませんでした。その彼が今日の 25 章では同じ原則に生きることが難しかった。一貫していないと言えば一貫していない。そのような弱さがあったのです。確かにダビデはこの時、苦しい状況にありました。600 人の部下を毎日養わなければならない重い責任がありました。そんな中、当然の報酬をもらえなかったばかりか侮辱までされた時、ダビデはカーッとしてしまったのです。そして自分の手で直ちに復讐しなくては！と駆り立てられてしまったのです。

しかし同時にここに示されているもう一つの彼の姿は、すぐ悔い改めて正しい主の道に立ち返ったということです。彼は頑固で自分を通す人ではなく「教えられやすい人」でした。彼は 32 節で自分の路線をガラッと転換しています。悔い改めてという言葉はここにありませんが、悔い改めは「方向転換」を意味するなら、まさにそのことを彼はここでしています。そして自分を復讐の罪から引き止めてくれたアビガイルと主に心からの感謝を述べています。

この結果はどうだったのでしょうか。今日の章の最後にはナバルの死が記されています。36 節で彼は王の宴会のような宴会を開いていました。アビガイルは翌日、彼の酔いがさめた時に、これまでのことを彼に告げます。すると彼は気を失って石のようになりました。きっとその内容に衝撃を受けたのでしょうか。そして 38 節に「十日ほどたって、主がナバルを打たれたので、彼は死んだ」と記されます。これを受けてダビデは 39 節のように言います。「私がナバルの手から受けたそしりに報復し、このしもべが悪を行うのを引き止めてくださった主が、ほめたたえられますように。主はナバルの悪を、その頭上に返された。」　ダビデが言っていることは主がさばきをなした！ということ。そしてその事実を前にして思うことは、自分が先走って彼に手を下さなくて良かった！ということです。私たちも改めて心に銘記すべきは、前の 24 章に続いて「主が報いをされる」ということです。私たちが報復しなくても主が報復される。ですから私たちのすることは、さばきは主にお委ねし、自らは主の前に正しく、責められるところのない歩みを重ねることです。ダビデはこのことをこの 25 章で学びます。そしてこのことが次の 26 章で生かされます。次の 26 章では前の 24 章を再現したかのようなことが起こります。サウルは再びダビデを追跡し、ダビデはまたしてもサウルに仕返しできるチャンスを与えられますが、彼はこの章で学んだ教訓を生かします。24 章と 26 章の間にあつて、この 25 章は彼が今後、座右の銘とすべき原則をしっかりと学ぶための時であった

のです。

私たちの前にも二つの道があります。それは愚か者の道と聡明な者の道です。私たちも誰かにひどいことを言われたり、されたりすると、当然の思いとして相手に仕返ししたい、相手にさばきを味わわせてやりたいと思うでしょう。その時、次のことを考えたのです。自分は愚か者の道を行こうとしているのか、それとも聡明な者の道を行こうとしているのか。もし愚かな相手に同じ仕方で応答するなら、それは愚かな人と一緒に愚か者の道に行くことです。ダビデはもう少しでその道を行ってしまいそうでした。しかしこの章が勧めているのは聡明なアビガイルが示した道です。箴言 12 章 16 節：「愚か者は自分の怒りをすぐ現わす。利口な者ははずかしめを受けても黙っている。」ここに愚か者と聡明な者とが対比されています。相手のしたことにすぐ反応し、怒りを現わすなら、その人は愚か者。しかし辱めを受けても、主に信頼して黙ってへり下っているなら、その人こそ利口な者、聡明な者です。20 章 22 節：『悪に報いてやろう。』と言ってはならない。主を待ち望め。主があなたを救われる。」これこそ、今日の章でアビガイルがダビデに示したメッセージではないでしょうか。そしてそれは私たちの主が示された姿でもありました。I ペテロ 2 章 22～23 節：「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」

神は私たち一人一人にも最善の計画を持って毎日を導いてくださっています。たとえどんな人が現れて私を攻撃しても、神が定めてくださった祝福の計画を妨害したり、邪魔することはできない。とするなら私たちは悪をする人にいちいち反応し、自らの手で仕返しするようなムダなことはすべきでないのではないのでしょうか。愚かな人と一緒になって愚か者にならないように。また自分でつまづきを置いたり、心の妨げを作ることがないようにすべきではないのでしょうか。むしろ私たちは「主が報いをされる」ことに信頼し、慰められる聡明な者の道を進みたいのです。ダビデはそのことを学び、祝福へと進んで行きます。私たちも聡明なアビガイルが示した道、また私たちの主イエス・キリストが取られた道に歩み、神が備えたもう最善の祝福に清い良心と喜びをもってあがる者へ導かれて行きたいと思います。